



Title	看護短期大学学生の、看護実践におけるふれあい場面の自我状態の傾向：交流分析「ふれあい分析：Fb」を用いた一考察
Author(s)	武藤, 眞佐子
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 13, 27-40
Issue Date	2000-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/37651
Type	bulletin (article)
File Information	13_27-40.pdf



[Instructions for use](#)

原 著

看護短期大学学生の、看護実践におけるふれあい場面の
自我状態の傾向——交流分析
「ふれあい分析：Fb」を用いた一考察——

武藤 眞佐子

**Ego-state tendencies of one nursing college student
when she has contact
(fureai) with patients during
her nursing practices in two different times—a study
using the transactional analysis, “fureai bunseki: Fb”—**

Masako Buto

Abstract

In the previous study “Changes in the egograms of Nursing College students over three years”, changes in ego-states were shown in the order of A, NP, CP. The purpose of this study was to understand the ego-state tendencies of one nursing college student during her nursing practice using the transactional analysis method, in order to obtain some ideas for the education for the basic nursing.

Method : Third-year nursing student described her nursing practice on analysis forms, and these descriptions were analyzed using the transactional analysis—fureai bunseki:Fb—arrow method. To compare tendency in May with one in September, descriptions by the student concerning clinical practice of adult nursing each time were examined.

Results : Looking at the ego-state tendencies of the nursing student when she had “contact with a patient who was depressed about his symptom aiming to progress recognition” in May, the nursing student showed state A, CP, and interlock of A and CP. When she had “contact with a patient who had anxiety about side effects aiming to progress recognition” in September, the nursing student finally showed states A, NP, and interlock of A and NP.

Conclusion : When the student had contact with a patient during nursing her practice, she tended to show state A (looking straight at reality), interlock of A and CP (making a value judgment based on professional experiences). It was suggested that these states form the basis for nursing profession’s warm and considerate attitude toward patients.

Key Word : basic nursing education, clinical practice of adult nursing, nursing college student, transactional analysis, Fureai bunseki:Fb,

北海道大学医療技術短期大学部看護学科 (〒060-0812 札幌市北区北12条5丁目)

Department of Nursing, College of Medical Technology, Hokkaido University

要 旨

研究目的：前回の研究「看護短大生の3年間のエゴグラムの変化」¹⁾は、A, NP, CPの順に変化を示した。今回は、看護実践場面で、看護学生の自我状態の働く傾向をとらえた。

方法：3年次の看護学生が自分の看護実践をふりかえり、分析用紙に記述したものを、交流分析「ふれあい分析：Fb」を用いて分析した。時期による傾向をみるため、同一学生の成人看護学実習のAとB(5月と9月)をとりあげた。

結果：看護学生の自我状態の傾向は、5月の「がっかりしている患者の認識の発展を促す」場面では、A, CP, “AとCP”の連動した働きが主で、9月の「副作用に不安のある患者の認識の発展を促す」場面では、A, “AとCP”の連動, “AとNP”の連動が主であった。結論：看護学生の自我状態は、中核に現実を直視し考えるAと、専門知識に裏づけられ価値判断する“AとCP”の連動した働きがあり、これに支えられ、熟慮された“AとNP”の連動したところの働きが可能となる。看護専門職者が対象者に、温もりのある看護を実践できるところの働きが示唆された。

キーワード：看護基礎教育, 成人看護学実習,
看護短期大学学生, 交流分析, ふれあい分析：Fb,

I. はじめに

看護場面において、看護学生は、患者と最良のふれあいができるようになるために、学んだ知識と技術を使い、患者に最も必要な看護を的確に実践し、問題解決ができるように実習を通して学ぶ。このことは、専門職者として、温もりのある・確かさのある・自律への支援をめざす、看護の目的を創出することを学ぶ。前回の研究「看護短期大学学生の3年間のエゴグラムの変

化」¹⁾では、看護基礎教育において、看護学生のエゴグラム(平均値)は、A, NP, CPの順に期待する方向に変化していた。3年間の縦断分析では、最も成長した自我状態はAであり、NPはCPとAが上昇した後で、実習の経過に伴って上昇し、3年次学年末のNPは最高値であった。しかし、少数ではあるが自我状態Aの成長が、1年次から低いまま卒業時に至る学生もみられた。

今回の研究の目的は、実際の看護場面において、3年次看護学生の自我状態は、どのように働いているのか、自我状態の働く傾向について、交流分析の手法を用いて明らかにする。この研究の意義は、交流分析の手法には、相互のやりとりの発信点と受信点をとらえ分析するやりとり分析がある。しかし、看護場面における看護婦(士)の言動は、「今・ここ」での対象者をアセスメント(対象者を理解し、看護の必要性を判断)し、看護計画に基づいて実践していることから、看護婦(士)の言動は、看護婦(士)の内面の思い・判断等に導かれて表現されている。このことから、植木・尾岸・武藤等の交流分析「ふれあい分析：Fb(Fureai bunseki)」(用語の定義参照)を用い、看護学生の内面の記録を含めて分析し、看護学生が患者とふれあうところの働き・自我状態の傾向を明らかにしたところにある。

先行研究について、看護実習の看護場面における、看護学生の自我状態の働く傾向を明らかにした研究報告はない。交流分析「ふれあい分析：Fb」を用いた報告は、著者等による交流分析第20回大会(1995年)報告²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾同学会第23回大会(1998年)報告⁷⁾と尾岸恵三子編「ナースのための交流分析の実際」の図書⁸⁾がある。これらは、“瞬時のふれあい”をふりかえり、自分のところの状態を分析し、他者とのふれあいを改善する方向を見出す手だてとして優れていることを明らかにしたものである。

この研究の範囲と限界は、看護学生と患者との看護実践の場面を取り上げているが、学生が自分の実際のふれあい場面を振り返り記述する、

認識の範囲にあり、限界は、研究対象者が学生ひとりを取り上げた分析である。

用語の定義

「添う看護」について：看護婦(士)は、「今・ここ」で患者とその家族に必要な看護をアセスメントし実践する。この実践は、相手の思いにふれ、共感し、相手のこころの揺れに寄り添い、精神的・身体的・社会的側面を統合し、看護判断し看とる。その内容は、保護・介護し、自然治癒力が働きやすいように整え(治療)、学習を援助し、支持する等の看護活動である。

「ふれあい分析Fb:Fureai bunseki」⁹⁾：①「ふれあい」について；看護は、人と人との瞬時のふれあいのいくつもの積み重ねのうえに成り立つと考える。瞬時のふれあいの機会は、言語的・非言語的に、あるいは直接的・間接的タッチで、さまざまなケアを通して意識的・無意識的に生じる。この瞬時のふれあいの、快・不快を左右するのは、お互いのこころの働きによる。「ふれあい」としたのは、「あなたのこころにそっとふれてよいですか。そっとふれさせてください」との想いが込められている。こころとこころの働き、相手に働くこころをくみとる表現として、「ふれあい」を用いた。②「ふれあい分析Fb:Fureai bunseki」について；「今・ここ」での対話の場面を分析する方法で、「こころの働き(機能分析)：5つの要素」を用いるやりとり分析である。

E. Berne(1910～71)は、「人間はみな、自分の内部に3つのこころ(自我状態)をもっている」と捉え、それにより人間の心理と言動を分析する手段とした。こころの働きの3つの構造は、1)親(Parent)の自我状態、2)大人(Adult)の自我状態、3)子ども(Child)の自我状態からなる。また、こころの働きの機能は、次の5つの要素で表現する¹⁰⁾(表1)。

(1)NP(Nurturing Parent):あるがままに相手を受け入れる優しさの度合い、受容性を意味する。

(2)CP(Controlling Parent):自分のあるべき状

態を示し、厳しさの度合い、規範性を意味する。
(3)A(Adult):事実を観察し、比較し、類推する合理性の度合い、総合性を意味する。

(4)AC(Adapted Child):一緒にいるために相手に合わせる、合わせる度合い、協調性を意味する。
(5)FC(Free Child):感じたことをありのままにあらわす、自由さの度合い、解放性を意味する。

「ふれあい分析:Fb矢線法(Fureai bunseki)」¹¹⁾は、これまでの交流パターン分析矢線方法(PAC矢線法)に加えて、相手に向かわない自己内部のこころの働きを重視している特徴がある。

相補交流¹²⁾とは、刺激と反応の矢線の方向(ベクトル)が平行で、(それに向けて)刺激が出された自我状態が反応するもの。コミュニケーションがスムーズで、健全な人間関係の自然な秩序に従っている。

交差交流¹³⁾とは、刺激と反応の矢線の方向(ベクトル)が平行ではない(crossed)。または反応している自我状態が、刺激が向けられたものではない。コミュニケーションは中断する。

II. 研究方法

研究対象は、3年次の看護学生が自分の実践した看護場面をふりかえり、ふれあい分析用紙に記述したものである。実習の時期による、ふれあい場面での自我状態の働く傾向をみるために、同一学生の成人看護学実習A(以下「成人実習A」という)5月と、成人看護学実習B(以下「成人実習B」という)9月の看護場面を取り上げた。

「成人実習A」は、健康の段階が急性期から回復期にある対象者とその家族への看護(手術療法を受ける患者を受け持ち、術前・術後の急性期から回復期における安全・安楽・自律への援助)を学ぶ。「成人実習B」は、慢性期・終末期にある対象者とその家族への看護(慢性期にある患者を受け持ち、急性増悪から慢性期の自己管理、あるいは死に向かう患者を受け持ち、その人らしく統合して生きられ、死への安寧)を学ぶ。

成人看護学における成人期の範囲を16才～64

表 1. 自我状態の基本概念

本来の働きが不足な状態	本来の働きの状態		本来の働きが過剰な状態
相手を思いやれない私 ①人への配慮がない ②人への関心が薄い ③温かみがない ④愛情がもてない ⑤冷淡な態度をとる	NP 思いや やる私	思いやる私 ①認める ②受け容れる ③信頼する ④育てる ⑤勇気づける	相手を甘えさせる私 ①過保護な ②甘やかす ③世話をしすぎる ④相手に尽くす ⑤過剰に期待する
価値づけできない私 ①話を鵜呑みにする ②決められない ③責任をとれない ④あいまいである ⑤だらしがらない	CP 価値 づける	価値づける私 ①経験に基づいて価値づける ②文化・伝統を守る ③規律・規範に従う ④教える ⑤責任をとる・とらせる	価値を押しつける私 ①決めつける ②押しつける ③干渉する ④こだわる ⑤独断する
観察・調整できない私 ①正確に観察できない ②現実に適応できない ③こころの働きの過不足を調整できない ④記録や確認が甘くなる ⑤評価や判断が適切でない	A 考える私	考える私 ①現実に適応する ②筋道をたてて考える ③情報を取捨選択する ④事実に基づいて判断する ⑤データに基づいて評価する	
合わせられない私 ①引き込み思案になる ②自分から働きかけられない ③聞かれないと応えられない ④口数が少ない ⑤存在感がうすい	AC 合 わせて いる	合わせている私 ①協調する ②協力する ③指示に従う ④従順である ⑤人当たりがよい	自分を抑え込んでいる私 ①すぐ妥協する ②よく思われたがる ③依存する ④遠慮する ⑤つまらないことを気にする
楽しめない私 ①感じたことの表出が少ない ②表情が固い ③陰気くさい ④萎縮している ⑤気力が出せない	FC あ りの ま ま の 私	ありのままの私 ①感じたまま表現する ②のびのびしている ③想像力がある ④直感する ⑤やる気がある	わがままな私 ①自分さえよければ良い ②羽目をはずす ③調子にのる ④度をすごす ⑤軽率である

(植木清直,尾岸恵三子,日沼千尋,武藤真佐子,水越澄江: ナースのための交流分析の実際,医学書院, p.4.2000.)
 自我状態の要素は、下から上へ発達順に配列。

「A 考える私; 過剰な状態」が空になっている。改訂前は、理詰め私-①割り切りすぎる、②味もそっけもない、③心情を無視する、④データを過信する、⑤打算的である(勘定高い) - が位置していたが、1987年改訂後、①④⑤はCP過剰に、②③はNP不足に位置づけられ、A過剰な状態というのではない。

才としているが実習では、実習期間と実習部署ならびに配置される学生数等の制約から、成人期から老年期を学生の受け持ち対象者としている。

看護学生は、卒業研究の一貫として、交流分析-「ふれあい分析:Fb」を4月中旬から11月末迄学び¹⁰⁾、9月の「成人実習B」で活用した。

研究期間は、1999年5月～2000年6月である。

2. 分析方法

「ふれあい分析:Fb矢線法」による。これは、

自分の看護場面を振り返り、記録用紙⁸⁾に記入する。次に、ふれあい分析用紙(図1-1)に記述して分析し、自我状態の5つの要素の働く傾向をとらえる。Fb矢線法⁹⁾では次の3つの基本ルールに従って矢線を描く(図1-2)。①反応・言動に方向性がある場合: 発信点から着信点に向けて矢線を引く。(例NP→FC)②反応・言動に方向性がない場合: 働いている要素にマークをつける。Aを○で囲み、太陽のように放射状に線を書き込む。③反応している要素が自己の中

図1. ふれあい分析：Fb矢線法 (Fureai bunseki)

ふれあい分析 記述者	事例名/場面		年 月 日	
相手の行動 言葉・行為・態度 の各種の言語的・身 体的表現を、観察で きたことを、具体的 に書く	こころの働き (自我状態の要素 は、下から上へ 発達順に)	私の反応 相手の行動や環境な どへの私の反応私の 価値づけ、判断、推 測、快不快など情動 反応などもこころの セリフとして書く	私の行動 言葉・行為・態度・な どの各種の言語的・ 身体的表現を、時の 流れ順に詳しく、具 体的に短文で書く	考察・他
	相手	私		
	NP CP A AC FC	NP CP A AC FC		
	○ ○	○ ○		
	∴	∴		

図1-1 ふれあい分析—4列式 (植木清直, 尾岸恵三子, 日沼千尋, 武藤眞佐子, 水越澄江：
ナースのための交流分析の実際, 医学書院, p.20,2000.)

で連動している場合：要素同士に円弧を描く。
方向性があるばあいには、発信点から着信点
に向けて円弧の矢線を描く。受・発信が相互に

われる場合には双方向の円弧に矢線を描く。
尚、本研究にふれあい分析学習の一部を使用
することについて、学生から承認を得た。

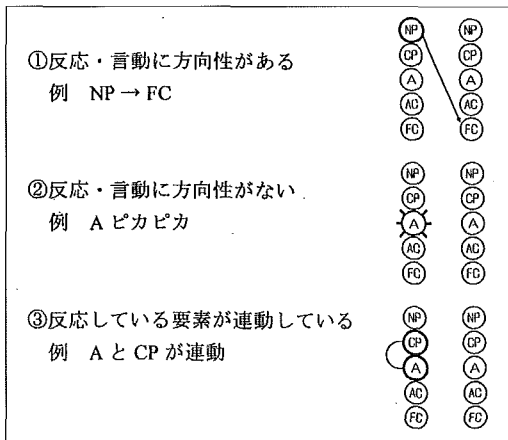


図1-2 Fb矢線法での取り決め
(植木清直, 尾岸恵三子, 日沼千尋, 武藤眞佐子, 水越澄江：
ナースのための交流分析の実際, 医学書院, p.3-5,2000.)

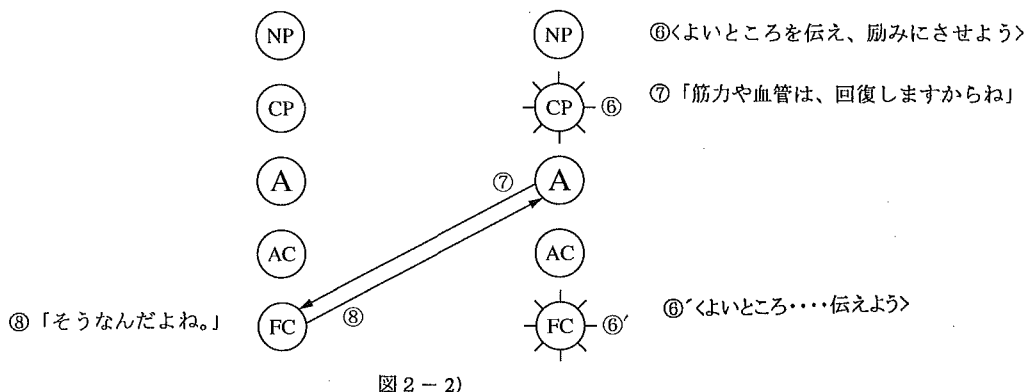
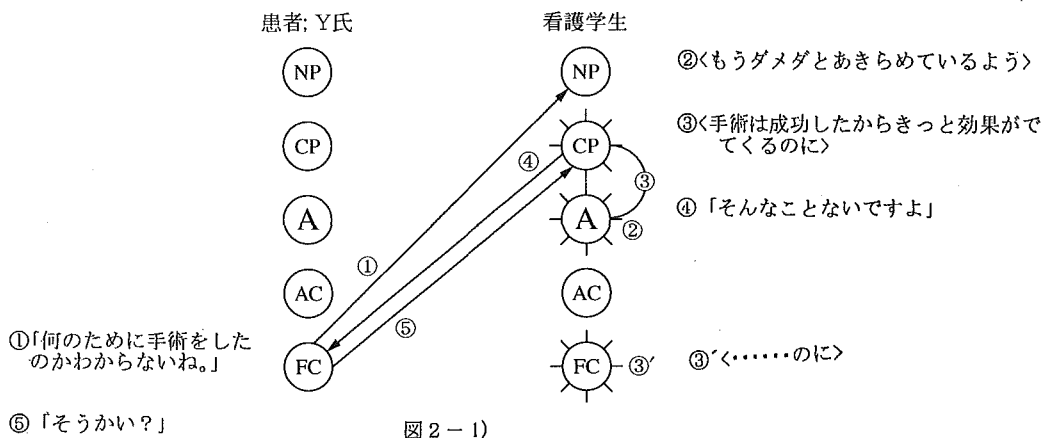
Ⅲ. 結果

1. 「成人実習A」(5月)における看護場面
のふれあい分析 (< > 印内の文は、看護学生の
内面の表現である)。

対話場面の紹介

「Y氏(73才,男性)は、第4・5腰椎すべり症
のため、長い間神経を圧迫し、約15年前から足
のしびれ、腰痛などの神経症状が出ていた。そ
のため手術(後方固定術)をうけた。Y氏は昨
日教授から『足のしびれと仲良く付き合ってい
きましょう』と言われ、『やっぱり長い間、神
経は圧迫されていて、細くなっているから、圧

図2. 手術後、足のしびれの回復は望めないのがっかりしている患者とのふれあい場面



迫をとってやってもそれは治るかどうかわからないんだ』と話し、苦笑いしていた。

Y氏は、廊下側のベッドに臥床し、看護学生はベッドサイドで椅子に腰掛けて話した。

Y氏は、『何のために手術をしたのか分からないね』と看護学生にいった。

看護学生は、〈だめだとあきらめているよう〉、〈手術は成功したからきっと効果が出てくるのに〉と思った。看護学生は、『そんなことはないですよ』と言うと、Y氏は、『そうかい?』と聞き返した。看護学生は、〈よいところを伝え励みにさせよう〉と、『筋力や血管は回復しますからね』と話した。Y氏は、『そうなんだよね。』と応えた。

看護学生は、〈少しよいところがみえてきた

かな。〉『はい、だから筋肉がついて足の力がついてきますよ』と話した。Y氏は、『そうだね』と応え、表情が少し安心したようになった。看護学生は、〈少し不安が軽減されたよう〉『だから頑張って、歩いて、早く回復させましょうね。』と話した。

Y氏は、『そうだね。頑張らなくちゃ』と応えた。

看護学生は、〈少し希望がみえ、やる気が湧いてきたよう〉と思い、『がんばりましょうね』とY氏に話した。(以上、学生の事例記録から引用した)。

ふれあい分析

手術後、足のしびれの回復は望めないのがっかりしているY氏とのふれあいの場面は図2. 図2-1)～2-4)を参照。

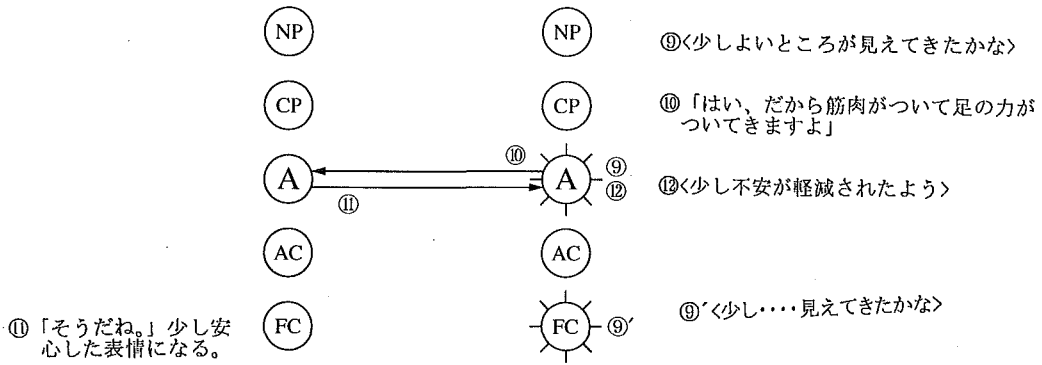


図 2 - 3)

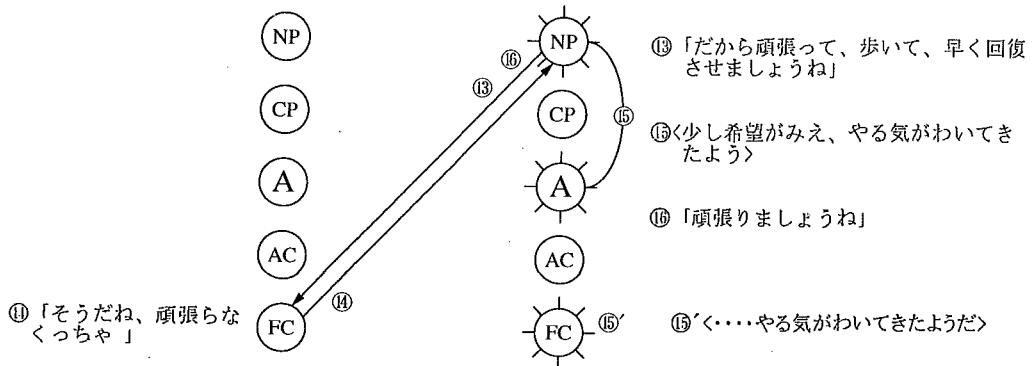


図 2 - 4)

図 2 - 1) Y氏は、①「何のために手術をしたのかわからないね」と看護学生にいった、自我状態の矢線は、Y氏(発信者)の「ありのままの私:FC」から看護学生(受信者)の「思いやる私:NP」へと向かった(以下、自我状態の矢線の方向の表現をFC→NPと記す、他も同様)。それを聞いて看護学生は内面で、②くだめだとあきらめているよう」とY氏の実事を捉えており、看護学生のAが働いた(矢線に方向は無い)。以下Aと記す、他の場合も同様)。③<手術は成功したからきっと効果が出てくるのに>と、手術は成功したという情報をAの自我状態で考え、同時に専門知識—手術療法・リハビリテーション・看護(合併症の予防・回復を促す、ならびに本人のやる気を支える)—を活用し価値判断し、CPの自我状態と連動している。(以下

“AとCP”の連動と記す、他の場合も同様) また③<…のに>は看護学生の自然な思いであり、いきいきとした生きる力が働いているFC。看護学生は、④「そんなことはないですよ」と言ったCP→FC。Y氏は、⑤「そうかい?」と問うたFC→CP。

看護学生は、がっかりしているY氏が、「今・ここ」にいる事実を捉え考え、③で、専門知識・治療効果・看護の目的に基づいて意味づけし、価値づけしている。Y氏にやる気が湧き、希望に向かう動機づけへと発想しており、この③によって、看護学生の言動④が実施された。Y氏の認識が発展するようにとの思いに至る看護学生のこころの軌跡である。

図 2 - 2)看護学生の内面では、⑥<よいところを伝え励みにさせよう>と価値判断したC

P,同時に〈よいところを…させよう〉と,看護学生のやる気が働いているFC。看護学生は,⑦「筋力や血管は回復しますからね」と話したA→FC。Y氏は,⑧「そうなんだよね。」と応えたFC→A。⑦と⑧は相補交流である。

看護学生の⑥は,手術療法の効果が現れるように,継続して取り組めるための“励み”をと,専門知識を使って看護判断している。ここでCPが働いていることが重要となる。“励みになるもの”を示す看護学生の自我状態は,“励みになるもの”を探している自我状態CPとFCが働いている。看護学生は,Y氏に直接「…すべき」と,CPの自我状態からは対応していない。自我状態をAに切り替えて,“励みになるもの”を客観的に示す対応をした。

Y氏の⑧は自分に,“効果を期待していくように”と言い聞かせている様子である。Y氏は,①の“否定的に受けとめ,がっかりした気持”から,肯定的な気持へと変化した。Y氏のFCの心的エネルギーは,不足な状態から,本来のこのころの働きが可能な方向へと充足されてきた。

図2-3)看護学生は⑨〈少しよいところが見えてきたかな〉とY氏を見て考えA,⑩「はい,だから筋肉がついて足の力がついてきますよ」と話したA→A。Y氏は,⑪「そうだね」と情報を考えて応えたA→A,看護学生は,⑫〈少し不安が軽減されたよう〉とことばと表情を捉えたA。「考える自我状態」の働くAからAの対応は,Y氏の理性的な思考が働き,事実に基づいて考え,筋道をたてて考えることを促し,現実に適応する言動を示した。⑩と⑪は相補交流である。

図2-4)看護学生は,⑬「だから頑張っ,歩いて,早く回復させましょうね。」と勇気づけ,支持的に促したNP→FC。

Y氏は,⑭「そうだね。頑張らなくちゃ」と応えたFC→NP。看護学生は,⑮〈少し希望がみえ,やる気が湧いてきたよう〉とY氏の変化を見,考え,受けとめ“AとNP”が連動し,⑯で,「がんばりましょうね」とY氏の表現したことは

を使い応えた,支持的対応であるNP→FC。

看護学生の⑬は,Y氏の⑫のありようを捉え,その思いを支持的に勇気づけ,やる気がたかまるように対応したNP→FC。⑭Y氏は頑張る気持ちを表現できた。⑮は“AとNP”は連動して働き,「今・ここ」のY氏の変化を捉え,そして思いやり,⑯は,Y氏のやる気を表現したことばを使いしっかりと支えた。Y氏⑭のやる気の表現は,FC本来のこのころの働きへと整っている。

以上,図2-1)~2-4)の分析から,看護学生は,Y氏の気がかり・心配の原因を理解し,それに意味づけ,価値づけし,問題を解決する方向を見極めている。Y氏が了解していく過程に寄り添い,共に歩み,相互作用を展開できる必要がある。そのためには,看護学生の自我状態は,AとCPが常に働いていることが示唆された。

2. 「成人実習B」(9月)における看護場面のふれあい分析

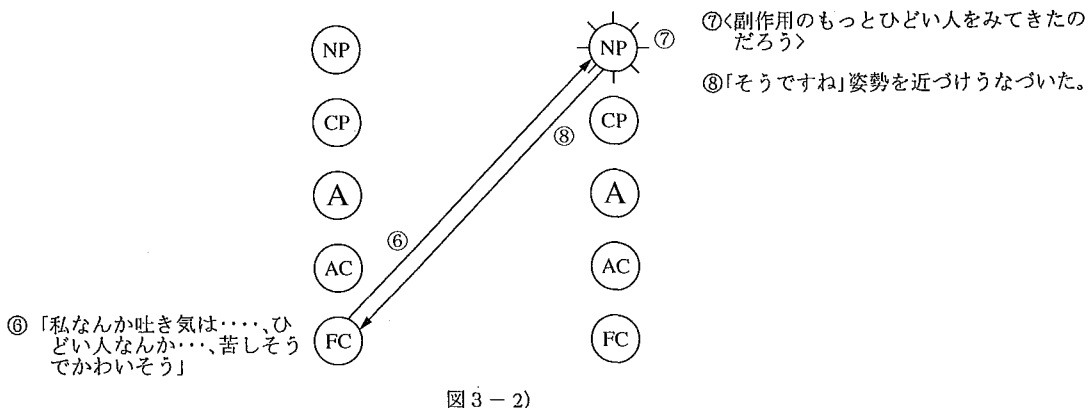
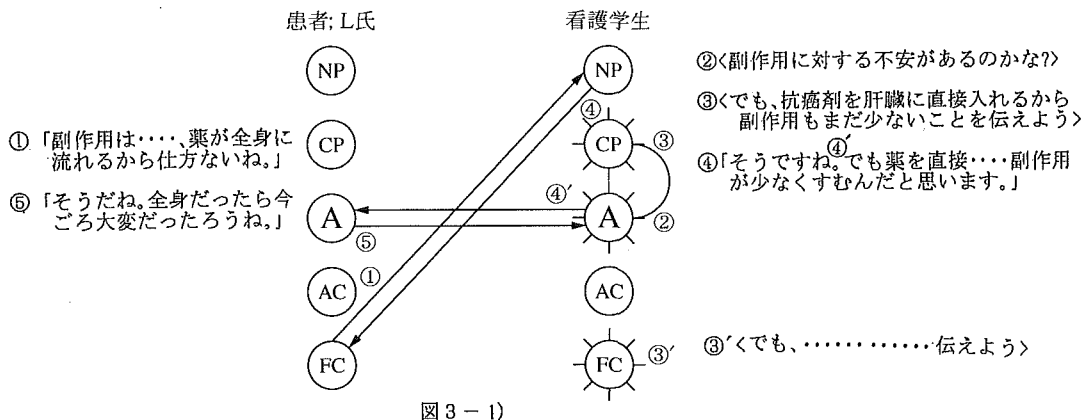
対話場面の紹介

「L氏(60才,男性)は,話すことの好きな明るい方で,自分の思いや考えを他人に伝えることができる。家族(妻56才と娘2人)は,毎日面会に来ていた。L氏と家族はともに1ヶ月前に癌の告知をうけ,いまは,化学療法を肝動脈から持続的に注入していた。副作用の嘔気は,内服で治まっており,他に副作用はなく,順調に治療が行われていた。

L氏は,壁を頭にベッド上に横になり,看護学生はベッド・サイドで椅子に腰掛けて話した。

L氏は,『副作用はやっぱり,血液を通して薬が全身に流れるからしかたないね。』と話した。聞いていた看護学生は〈副作用に対する不安があるのかな?〉,〈でも,抗癌剤を肝臓に直接入れるから副作用もまだ少ないことを伝えよう。〉と考えL氏へ『そうですね。でも薬を直接肝臓に入れているので,そのまま全身に入れるよりずっと副作用が少なくすむんだと思います。』と話した。L氏は,『そうだね。全身だったら今ごろ大

図3. 薬物の副作用による苦しさや不安のある患者とのふれあい



変だったろうね。』、『私なんか吐き気はまだいいほうだけど、ひどい人なんかもう出ないのに(吐物が出ない)、ウツと苦しそうでかわいそう。』と話した。看護学生は「副作用のもっとひどい人を見てきたのだろうか。」と思い『そうですね』と応えた。

L氏は、『副作用はすごくつらいもの。だからもうダメ。もうイヤダ。痛いつらいと言ってしまふのはわかるよね。だから医者も苦痛を取り除くために薬を減らしたりしていく。でも頑張ろうと前向きに進んでいこうとすれば医者も治療を続けていこうとする。』と話した。聞いていた看護学生は、〈副作用のつらさはわかっているよう。そのつらさに負けてしまいたくない、という不安と思いがあるのだろうか。〉と考え『そうですね。』

副作用はすごくつらいものですね。』、『そんな時大切なのは本人の気持ちなんでしょうね。』と話した。L氏は『ああ、結局、人間、病気になると一番大切なのは、その人の生命力だね。』と話した。看護学生は「精神的なものが大切ということはわかっているようである。きっと、いろいろ考え、そう考えているのだろう。」と思ったので、『そうですね。頑張ろうという気持ちはとても大切だと思います。だからLさんも頑張ってくださいね。』と話した。L氏は『ああ。頑張るよ。』と応えた(以上、学生の事例記録から引用した)。

ふれあい分析

薬物の副作用による苦しさや不安のあるL氏とのふれあいの場面は図3. 図3-1)～3-5)を参照。

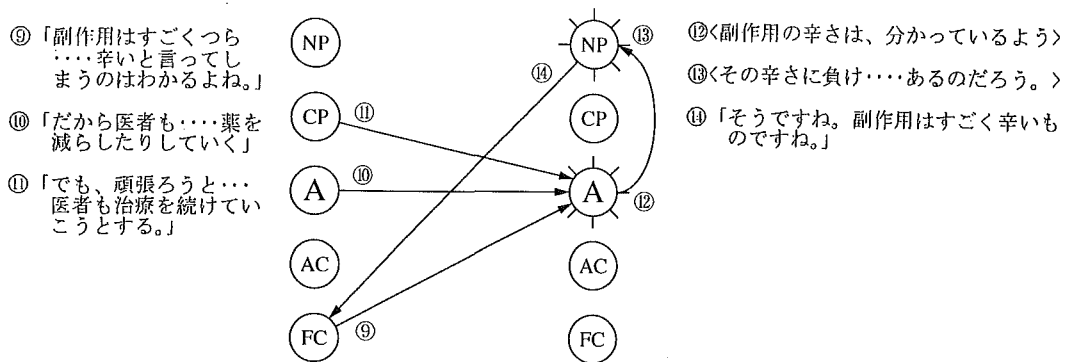


図 3-3)

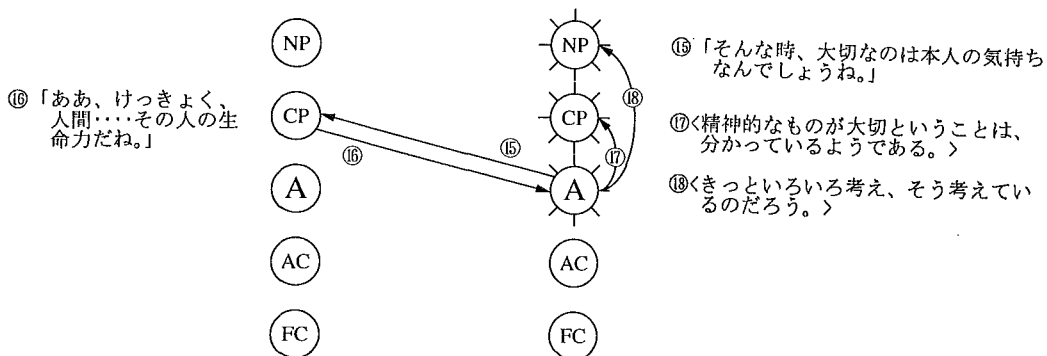


図 3-4)

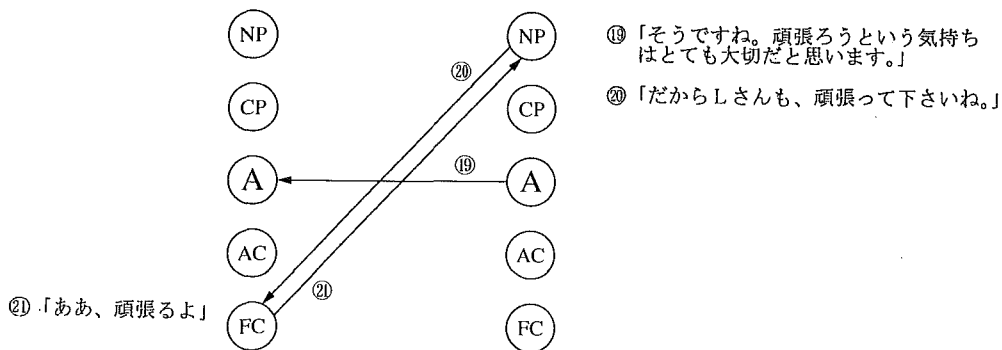


図 3-5)

図 3-1) L氏は、①「副作用はやっぱり、血液を通して薬が全身に流れるからしかたないね。」と話したFC→NP。看護学生の内面では、②<副作用に対する不安があるのかな?>と考

えA、③<でも、抗癌剤を肝臓に直接入れるから副作用もまだ少ないことを伝えよう。>と知識を活用して価値判断した“AとCP”が連動している。また、③’の<でも、…伝えよう>は、

看護学生の意気込みFCが働いた。

看護学生は、④「そうですね…」とNP→FCへ向かい、④′「…でも薬を直接肝臓に入れているので、そのまま全身に入れるよりずっと副作用が少なくすむんだと思います。」と話したA→A。L氏は、⑤「そうだね。全身だったらいまごろ大変だったろうね。」と応えたA→A。①と④、④′と⑤は相補交流。

看護学生の内面②と③では、「今・ここ」で話すL氏の思いに注目し、専門知識と看護の目的に基づいて、肯定的な意味づけをし、伝える必要性を判断した。“AとCP”が連動して働き、③′ではやる気のFCも働いている。看護学生は意味づけし、価値判断して伝えようと決断した。自我状態は“AとCP”の連動とFCが働いているが、直接その自我状態からL氏に向けては対応していない。看護学生の④と④′の言動はL氏を受容し、そして、考えるAの自我状態に移り、AからL氏が合理的に考えられるAの自我状態に向けられた。その結果、L氏の⑤では、現在の治療法による、メリットを考え、症状や苦痛を受けとめやすい方向へと認識が変化した。L氏が自分なりに意味づけできるようにと、認識の発展を促す対応は、AからAの相補交流となっている。

図3-2) L氏は、⑥「私なんか吐き気はまだいいほうだけど、ひどい人なんかもう出ないのに(吐物が出ない)、ウツと苦しそうでかわいそう。」と話したFC→NP。看護学生は、⑦〈副作用のもっとひどい人を見てきたのだろう。〉と思いやり、受容したNP。看護学生は、⑧「そうですね。」と姿勢を少し近づけうなづいたNP→FC。⑥と⑧は相補交流である。

L氏の辛さと思いを受けとめ、自分の身を近づけた言動は受容的である。人は苦悩を訴える場合、相手には関心と思いやりをもってよく聴いてほしいもので、L氏のFC不足(症状の辛さを訴える)に看護学生はNPから関心と思いやりをもってふれあっていた。

看護学生が感じた思いを、FCから素直に表現すれば、L氏の心情に共感している状況が伝わりやすい。しかし、看護学生は、P(親)とA(大人)の自我状態を働かせているが、自分らしさを自然に緊張せずに表現するFCの自我状態からの言動はない。年輩の人生経験のある患者への対応では、自分自身のFCからの表現を抑え込みやすい傾向がうかがわれる。

図3-3) L氏は、⑨「副作用はすごくつらいもの。だからもうダメ。もうイヤダ。痛いっらいと言ってしまうのはわかるよね。」と話したFC→A、⑩「だから医者も苦痛を取り除くために薬を減らしたりしていく」とA→A、⑪「でも頑張ろうと前向きに進んでいこうとすれば医者も治療を続けていこうとする。」と話したCP→A。看護学生の内面は、⑫〈副作用のつらさはわかっているよう〉と考えA、⑬〈そのつらさに負けてしまいたくないという不安と思いがあろう〉と思いやり自我状態へと移り、“AとNP”は連動して働いた。看護学生は、⑭「そうですね。副作用はすごくつらいものです。」と話したNP→FC。

L氏は、3つの自我状態(⑨FC、⑩A、⑪CP)から、看護学生のAへと向けて話した。看護学生の⑫は、Aで受けとめている。L氏の話す内容を聴き、L氏の不安や、治療についての考え、L氏の信念を受けとめ考え、この⑫に基づいて⑬では、L氏的心情・価値観を理解した。看護学生は、L氏の思いの核心を聴き、看護学生の⑭の対応は、NPからL氏の不安のFCに向けて受容的にふれあった。

図3-4) 看護学生は、⑮「そんな時大切なのは本人の気持ちなんでしょうね。」と話したA→CP。L氏は、⑯「ああ、結局、人間、病気になるが一番大切なのは、その人の生命力だね。」と話したCP→A(⑮と⑯は相補交流)。看護学生の内面では、⑰〈精神的なものが大切ということはわかっているようである〉とL氏の考えを受けとめ、価値判断した“AとCP”の連

動。⑱ くきっと、いろいろ考え、そう考えているのだろう」と考え受けとめた“AとNP”の連動。

看護学生は、L氏の信念を率直に聴いた⑮で、L氏へ対応する時には、自我状態をCPからAへ切り替えている。L氏の話された内容をAとCPが連動し、判断して聴き、⑱では、NPと連動して働いている。看護学生は、L氏の気持ちを尊重し、支えていくようにしたいと考えたようである。

図3-5) 看護学生は、⑲「そうですね。頑張ろうという気持ちはとても大切だと思います。」と話したA→A。つづけて⑳「だからLさんも頑張ってくださいね。」とうなづき、姿勢を近づけ、L氏にまなざしを向けて話したNP→FC。L氏は㉑「ああ。頑張るよ。」と応えたFC→NP。㉒と㉓は相補交流である。

看護学生は、L氏の考え・思いを聴いて、自分もまた、自分の考え・思いをL氏に肯定的に、支持的に、自我状態のAから述べている。そして、大変な辛さを続けているL氏を思いやり勇気づけ、㉒ではNPからL氏のFCへと対応した。L氏は、㉓頑張る気持ちをFCから表現している。このことは副作用の辛さと、不安な思いから、本来の自我状態が働く方向へ気持ちが向いたといえる。

看護学生が言った㉒「だから…下さいね。」の言葉について、この言葉を使う時の自我状態は一般に指示的であり、CPである。しかし、看護学生は、実際には思いやりをこめて話し、うなづき、姿勢を近づけ、L氏にまなざしを向けて、NPで表現していた。適切なことばを使い自己表現ができるようになるための修練の必要性が示唆された。

IV. 考察

1. 「成人実習A」(5月)の自我状態の傾向は、A, CP, “AとCP”の連動が多く働いた。実習開始の時期であったが、専門知識を活用し、根

拠をもって患者とふれあっており、看護の実践がなされていた。

2. 「成人実習B」(9月)の自我状態の傾向は、A, CP, NP, “AとCP”の連動, “AとNP”が連動して働いた。一方、看護学生自身のFCの自我状態の働きは不足の傾向で、自分らしさの表現は押さえられていることが示唆された。受け持ち患者が年輩で、自分の価値観を明確に表現される場合、看護学生の対応は、FCを押さええている傾向が伺われた。

3. 両看護場面共に、患者とのふれあいは、相補交流が多かった。

4. 1と2から、看護学生の看護実践における自我状態の傾向は、Aが最も働いていた。Aは他の自我状態へと連動している傾向があった。実習当初(5月)の「成人実習A」では、A, “AとCP”が連動して働き、患者の問題へ対応する傾向があった。実習の中頃(9月)の「成人実習B」では、A, “AとCP”が連動して働き、この自我状態の働きによって、“AとNP”が連動して働き、患者の思い・信念等を聴き問題へ対応する傾向があった。

5. Aの働きは、事実を照らして考えることである。看護の実践場面で、患者に必要な援助をアセスメントし、「今・ここ」にいる患者に寄り添う看護となるために、Aが的確に働くことは重要である。さらに、関心をもってふれあう中で、予測し、洞察し、総合的に筋道をたてて考えるのである。Aの自我状態は、CPと連動することによって、より関心を持ち、系統的、専門的に事実を把握し、考えていくことになる。

CPの働きは、看護実践場面では常に専門知識・価値観が活用されていた。専門性が問われる看護学実習(授業としての位置づけ)においては、これまでに学んだ知識・技術、価値観等が活用できるように準備されていることが必須条件となることが再確認された。

実習において、Aの働きは最も向上する。

それには、CPが働くように準備することが必要となる。新カリキュラムにおける、看護学の領域が広がるのに従って、各看護学の実習は短期間でローテーションする。各看護学における効果的な実習準備への方向づけには、学生自身が自覚的に準備をし実習に臨むことが必要条件となる。

NPの働きは、看護学実習では、専門性に根ざした、思いやり・受容・支持的な対応である。

このような対応によって、患者は保護され、こころが温まり、心的エネルギーの不足な状況は充足され、こころは本来の自我状態の働きへと促される。

FCの働きは、看護者自身のもつ自然でいきいきとした雰囲気、相手に伝える。それは、伸びやかさ、楽しさといった人のもつ雰囲気、やる気や生命力等である。看護学生は、自分より年輩の患者を対象に看護した場合、自我状態は、P（親）とA（大人）を主に働かせ、FCの働きを抑える傾向であった。場に応じて、Aが働き、自分らしくFCを表現できることは重要である。今後の課題として、発達段階の異なる相手と対等なふれあいのできる表現の仕方を学ぶ必要性が示唆された。ACの働きは、看護場面で、看護学生は、実習環境、患者と自分、看護上の問題の展開等、学習課題をもった自分（人間）としてACを働かせている。今回取り上げた看護実践の「今・ここ」では、看護学生のAが働き、CPが働き、NPが働いていた。過度に自分を気にしたり、または相手を気にするACの過剰適応あるいは、AC不足による萎縮した対応はなかった。ACは、本来の働きの状態にあったといえる。

V. 結論

今回の研究の結果、次のことが明らかとなった。看護学実習の看護場面におけるふれあい分

析では、看護学生の自我状態は、現実を直視し考えるAと専門知識に裏づけられ価値判断する“AとCP”の連動が、看護学生のこころの働きの中核となって働いていた。この働きによって、場に応じた的確に、そして目標志向性を持ち、専門知識を活用出来ることとなる。この中核となるこころの働きに支えられ、温もりのある、熟慮された対応が可能となり、Aと“AとNP”の連動するこころの働きが、実現できるようになることを示唆された。

おわりに

今回は、3年次看護学生の成人看護学実習における患者とのふれあいを分析することによって、こころの軌跡をとらえ、自我状態の傾向から成長のあり様をとらえた。本研究の限界は、学生1人をとりあげ分析したものであり、今後さらに多様な学生のあり様を分析していく必要がある。また、学生が自分の看護場面をふりかえり、対象者との瞬時のふれあいを、最良の看護へと変化させていく、教育方法を研究する必要がある。

引用文献

- 1) 武藤眞佐子：看護短期大学学生の3年間のエゴグラムの変化。北海道大学医療技術短期大学部紀要第12号：75-86, 1999.
- 2) 植木清直, 武藤眞佐子他：「瞬時のふれあい」を分析する研究—第1報交流パターン分析から「瞬時のふれあい」への展開。日本交流分析学会第20回大会抄録集：48, 1995.
- 3) 水越澄江, 武藤眞佐子他：「瞬時のふれあい」を分析する研究—第2報下肢を失ったことを告知していない患者への関わり。日本交流分析学会第20回大会抄録集：49, 1995.
- 4) 日沼千尋, 武藤眞佐子他：「瞬時のふれあい」を分析する研究—第3報手術を受ける幼児への関わり。日本交流分析学会第20回大会抄録集：50, 1995.

- 5) 武藤真佐子, 植木清直他:「瞬時のふれあい」を分析する研究—第4報死を受容している末期患者への関わり. 日本交流分析学会第20回大会: 51, 1995.
- 6) 尾岸恵三子, 武藤真佐子他:「瞬時のふれあい」を分析する研究—第5報食欲に表現された患者の心のゆれ. 日本交流分析学会第20回大会抄録集: 52, 1995.
- 7) 植木清直, 武藤真佐子他:「瞬時のふれあい」を分析する研究—第6報職業的な瞬時の行動について. 日本交流分析学会第23回大会抄録集: 2, 1998.
- 8) 尾岸恵三子・武藤真佐子他著:「ナースのための交流分析の実際」. 1-231, 医学書院, 2000,東京.
- 9) 同上書p.2-3.
- 10) 同上書p.4.
- 11) 同上書p.21.
- 12) Ian Stewart and Van Joines: TA TO DAY — A New Intoroduction to Transactional Analysis—60, 1987.
訳書—深沢道子監訳: 最新・交流分析入門. 実務教育出版,75, 1991.
- 13) Ibid., p.62, 同上書p.78.
- 14) 白井幸子: 看護にいかず交流分析 自分を知り, 自分を変えるために. 1-82, 医学書院, 1983.
- 15) 前掲書 8)3-5, 10-24.

【誤字 訂正のお願い】

北海道大学医療技術短期大学部紀要 No.12, 1999, p82, 図2に描かれているグラフのタイトルが誤っております。

<u>誤</u>		<u>正</u>
学年1	→	学生1
学年2	→	学生2
学年3	→	学生3